

熱戦が続きます

校 長 武井 正明

火曜日から始まった各種地区大会。
特に3年生のみなさんの心境は、いかがなものだろうか。

初戦で引退を迎えてしまった女子バスケ部。最終1分を切った戦いで雌雄が決した惜しい試合だったと聞いた。その悔しい敗戦から、もしかしたら自分たちは、もっとできていたかもしれない、自分はやろうとしたのか、という後悔も出てくるかもしれない。そのほろ苦さも、青春の貴重な1頁だと思うよ。

女子バレー部は、3年生ひとりという状況で、最後まで一生懸命に戦った。組織の中でひとりしかいない立場は孤独なものだ。その悩みや苦しみは他の人には、おそらくわかるまい。あなたのその経験は、これからの人生に、きっと大きく生きてくるはず。

地区大会を終え帰校した池上先生と話した。3年生は、代表決定戦にもつれる、或いは不本意な、予想以上の苦戦を強いられたという。

2年の時はいい。勝てば大手柄、負けてもまだ来年がある。部を背負う責任もない。

3年になるとそうはいかない。負ければ終わり、勝たなければいけない。自分たちの後ろには誰もいない。部は3年が背負っているのだから。

今大会、特に男子ソフトテニス部の3年生は、その重圧を痛感したのではないだろうか。得てして勝負事は、強い者が勝つとは限らない。勝った者が強いのだ。だから過去に勝ったという事実が、次の戦いの邪魔になる時さえある。

敢えて3年の、重圧に負けそうなあなたに言いたい。

相手に勝った過去など忘れろ。それに君は、それが確固たる自信になるほど、まだ強くなっていない。負けが怖かったらひたすら励め。対戦相手に左右されない絶対的な自信を得るために…。練習は裏切らない。そして最後は、自分自身を信じ切れるか、だ。

今日はバドミントンの、ある女子ペアに心惹かれた。

彼女らは中学に入って初めてバドミントンを始めた聞いた。「真面目に取り組めば、ここまで上手くなることを彼女たちが教えてくれました」と野俣先生は目を細める。

彼女らが向かうのは目の前のワンプレーのみ。そこには余計な邪念はない。あるのは無欲の、爽やかな笑顔だ。

このふたりの友情、そして生涯スポーツとしてのバドミントンは、まだ始まったばかりだ。

